

はじめに

他人の生活が気になるのは、人の常である。また、私たちには、同じ世界のどこかで暮らす人々を助けたいという思いやりの気持ちがある。世界には、富める者と貧しい者、病気の人と健康な人、安全な地域と危険な地域などの格差がある。その多様な格差を、私たちは自分のまわりの環境からだけでなく、さまざまメディアを通して知るようになってきた。政府職員・研究者・民間団体職員などの専門家は、これらの格差を解消する努力を行い、その活動を、国際開発と呼ぶ。

私は、これまでの研究生活において、国際開発へのアプローチの進歩に常に刺激を受けてきた。しかし、一つの学問分野やテーマにとらわれているような言説に不満を感じてきたことも事実である。人々や社会を繁栄させるものは何か、と問われたとき、それに答える豊かな洞察力や創造性はさまざまな分野の交差点あるいは各分野の専門家たちの交わりの中に見られる。私は、社会問題・教育問題の解決に向けて取り組むとき、学問分野の垣根を超えて学ぶことを大切にしてきた。

それゆえ、必然的に、本書では、学びと教育と国際開発を同時に扱う。特に学びの格差縮小がどのように生活を改善できるかについて取り上げた。学びは人間開発の根本である。私たちは、学びによって、人生のさまざまな選択肢に備えている。また、学習は、社会的な成功や抵抗力を大きく左右する。私は、本書において、さまざまな学問分野におけるこれまでの知見と視点を整理し、学びに関する政策と実践の改善を目指す新しい方向性を示そうとしている。

世界は、内戦、感染症の拡大、大規模な人口移動、若者の失業、気候変動など、前例のない課題に直面している。知識を持った市民だけが、これらの課題に効果的に取り組むことができる。つまり、総力を挙げて、子ども・若者・大人（特に、社会の周縁に置かれた貧しい人々）の学びと幸福を追求しようとするのが、今ほど重要なときはない。また、これらの課題に取り組むために私たちが備えている力も、かつてないほどに高まっていて、学びと教育の不公平さを

解消するために何が必要かに関する知識を持っている。真に公平な学びの達成を課題として掲げ、行動力と思いやりの気持ちがあれば、私たちははるかに良い未来を構築できる。これが本書の主張である。

本書の執筆にあたり、多くの友人や同僚から有益なコメントや批判を頂いた。Alejandro Adler, Bob Boruch, Julian Cristia, Luis Crouch, Amy Jo Dowd, Peter Easton, Elliot Friedlander, Steve Heyneman, Iddo Gal, Amber Gove, Ameena Ghaffar-Kucher, Priya Joshi, Steve Klees, Robert A. LeVine, Joshua Muskin, Michelle Neuman, Scott Paris, Ben Piper, Sidney Strauss, Tim Unwin, Sharon Wolf (敬称略) の諸氏にお礼申し上げます。また、特に旧来の研究パートナーである、C. J. Daswani, Masennya Dikotla, Wadi Haddad, and Mohamed Maamouri (敬称略) の諸氏には、時間を割いて批判的考察をして頂いた。本書に関してだけでなく、彼らの長年にわたる励ましと友情に感謝の意を表す。

最後に、この日本語版の出版に当たり、特に前田美子氏に謝意を表したい。彼女の努力とスキルなくしては、出版が叶うことはなかった。本書のような本は日本語ではあまり出版されていない、もっと多くの日本人たちにこれを読んでほしいと、彼女が出版を勧めてくれた。日本は、自国の子どもだけでなく貧しい国・環境に置かれた子どもの学びと教育を向上させるためにたゆまぬ努力をしている。本書はそのような日本の取り組みに示唆を与えるものとなるだろう。